

ヨハネによる福音書 11章1-16節

先月からホーリネスの群れが掲げている四重の福音を学んでおり、「新生」「聖化」を見て参りました。本日は三番目にあたる「神癒」についてです。癒しとはヘブル語で「癒す(ラーファー)」という語源で、二つの意味があります。私たちが直ぐに思い浮かぶのは、体や家などを「治療、癒し、回復、修復」するという意味ですが、それ以外に罪や汚れから「清める、清くする」という意味もあります。先ほど交読詩編 100:3-4 をお読みしたように、神様は私たちの肉体の病気や傷を癒やし、私たちが罪・汚れから清め、神との正しい関係へと回復させる、という意味があることに目を留めたいと思います。

主に愛されていても、主に用いられていても

本日開かれている聖書の内容は、ベタニアという村にイエス様に愛されていたマリアとマルタという姉妹、そしてその兄弟のラザロが住んでいましたが、ラザロは命にかかわる重病に罹っており、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです。」とイエス様に助けを求めた時のことです。

病気という苦難が襲われると、なぜ病気に、なぜこんな苦しい思いをしなくてはならないのかと問いたくなるものです。この姉妹たちはイエス様「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです。」と訴えています。考えてみると病気だけではなく、困難に陥った時でも「あなたが愛しておられるのにどうして・・・」と訴えたいくなるものです。翻っていうなら病や困難の原因は、「主が愛しておられないから」ということになってしまうのではないのでしょうか。決してそうではないということがいえます。主が愛しておられても、病に罹るし、苦難にも遭遇します。ですので、その原因を主が愛しているからとか、いないからという観点で判断してはならないことが聖書の各箇所からいえます。

キリスト教の最初の殉教者は、使徒言行録に記されているようにステファノでした。彼は恵みと力にみちていたとありますが、そのような者が殺されてしまったのです。また、伝道者として大いに用いられたパウロは持病をもっており、三度も祈り求めましたが「神の恵みはあなたに十分である」(II コリント 12:9)と告げられ癒されることはありませんでした。

私たちの身近な所では、ホーリネスの群れは戦時中、弾圧によって多くの牧師が投獄され、命を失った多くの牧師たちがおりました。イエス様が愛しておられてもラザロは病気になり、従順に主に仕えても教会は迫害で苦みました。病気や苦難に遭うことは、「イエス様が愛しておられない」ということを意味しないということです。

さて、マルタとその姉妹がイエス様を呼び求めているにも拘わらず、ラザロは死んでしまったのです。それでもなお、「イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた」とあります。それは、目に見えるところはいかにあれ、イエス様は愛しておられるのです。

病の先にある神の栄光

イエス様はラザロについて、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」(4節)と宣言されています。その病気は死で終わらない。死が最終的に行き着くところではない。その先がある、希望があるということです。ラザロは墓に

葬られて既に四日が経過していましたが、墓に着いたイエス様は、「その石を取りのけなさい」と言われます。そして、イエス様は父なる神に祈った後、「ラザロ、出て来なさい。」と言われると、ラザロは手と足を布で巻かれたまま出て来たのでした。確かにイエス様が言われたとおり「この病気は死で終わるものではない」。死んで終わりではないということが示されています。生きている間に助けがなかったら絶望的になると思います。しかし、ここでは究極の希望、究極の癒しが語られているのです。「たとえ死んでも終わりではない」、たとえ死んでしまったとしても、それは一過性のもので、突き抜けた希望、究極の癒しがあるのです。

この世の考えでは理解できないことですが、ラザロの出来事は教会でしかお聞きすることができない大切なことです。イエス様がおられるならば、死は終わりではない、死は絶望ではないのです。私たちには、死を突き抜けた希望を宣言することのできる方が既に与えられていることを是非とも心に留めてゆきたいです。

最終的に問われること

ラザロの姉妹のように、人は病気であれば癒しを求めます。欠乏があれば満たしを求めます。苦しみがあれば苦しみからの解放を求めます。また、神に向かって「なぜ」と問いかけます。訴えます。当然のことでしょう。しかし、それで終わらせてはならないのです。そこに留まるならば、力を失い弱っていただけです。

神の前に嘆きを注ぎ出したなら、今度はそこで神の言葉を聞かなくてはならないのです。私たちが知らされている御方、聞かされている御方、このイエス様に心の目をしっかりと向けることができるはずです。私たちには待ち望むべき未来、究極の癒しが既に与えられています。最終的に問われるのは、ただ神との関係だけなのです。それは罪の贖いのために十字架にかかれ、よみがえられた救い主、イエス様が究極の癒し主が、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」(4節)との御声をしっかりとお聞きして参りたいです。